

演題：失語症患者に対して視覚的教示により装具着脱動作が可能となった一症例

医療法人春風会 田上記念病院

○大田みづき 松下幸子 田中精一 川上剛 小田博重 中村浩一郎

【はじめに】

今回、脳卒中後に右大腿骨頸部骨折にて人工骨頭置換術(以下、BHA)を施行した患者に対して、視覚的教示による動作指導を行った結果、装具着脱動作可能となり自宅退院した症例を経験したのでここに報告する。

【症例紹介】

70歳台男性。X-2年に左前頭葉皮質下出血発症、右片麻痺と失語症を呈し、X年に転倒による右大腿骨頸部骨折受傷にてBHAが施行された。受傷前は床に短下肢装具を置き体幹前屈位で着脱可能であったが、禁忌肢位のため装具着脱方法変更の必要性があった。標準失語症検査プロフィールで聴理解は中等度レベルで口頭指示理解困難。FIM運動項目27点、下衣更衣1点であった。

【方法】

術後25日目より装具着脱動作練習開始。動作手順方法を口頭指示したが理解困難であったため模範動作を動画にて教示した。視覚的教示により動作介助要するも手順エラーなく1回で理解可能。その後、訓練時に①動画提示②項目毎の写真提示③口頭④指示なしと段階的に提示方法の変更を行った。

【結果】

術後38日目には禁忌肢位とならない方法での装具着脱動作が可能。FIM運動項目72点、下衣更衣6点となった。

【考察】

本症例は言語中枢の障害により聴理解が困難であったが、視覚野から前頭連合野までの機能が残存したことにより、模範という視覚情報を与えることで動作獲得に繋がったと考えられる。失語症患者に対する教示方法を選択する重要性を再認識した。